救世軍公報

GOOD NEWS ときのこえ

War Cry

4月号
福音版
2020
April
No.2799

二〇二〇年　四月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行（除く七月）

今年のイースターは
4月12日（日）です

彼が担ったのはわたしたちの病　彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに　わたしたちは思っていた　神の手にかかり、打たれたから　彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは　わたしたちの背きのためであり　彼が打ち砕かれたのは　わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ　彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。…そのわたしたちの罪をすべて　主は彼に負わせられた。（イザヤ書53章4～6節）

イースター・メッセージ
いやしと回復のために

大将　ブライアン・ペドル

イースターのメッセージは、わたしたちが聞き、応答し、経験できる、最も深い真理であり、人生を変え、命を与えます。つまりイースターの物語（イエスの十字架での死と三日目の復活）は、贖いによって人を回復させる神の救いの計画の集大成なのです。無条件で与えられる犠牲的愛は、神の憐れみと恵み、赦しをもたらします。それゆえ、神を信じる者たちは、畏れおののきつつ無限の喜びを体験し、新たな自由を祝い、全能者である方との新しい活気ある関係に生きるべきです。

預言者イザヤが記した言葉に、神がイエスにおいてなされたことを見ます。イエスは実に前向きに十字架に向かわれました。たとえそれが痛み、嘲笑、破壊を彼にもたらし、深い親密さで結ばれた永遠なる父からの分離を伴おうとも、否定的で壊滅的な痛みのすべてを引き受けられました。このイエスの純粋な、無条件かつ犠牲的愛の行動は、人類史上類を見ないものです。

さらに、イエスがしてくださったことを読み、考えるならば、罪からの解放と重荷の消失、自由を感じます。イエスはわたしたちの病を引き受け、悲しみを負ってくださいます。「言は肉となって」とあるように（ヨハネによる福音書1章14節）、完全に人間であり、完全に神であるイエスは、人間のもろさ、弱さ、不完全さを理解しておられるのです。また、それ以上の意味も見逃すことはできません。

イエスは、わたしたちと同様になる以上のことをしてくださり、人間の弱さ、病、悲しみをその身に引き受けられました。もはやわたしたちは、それらを担う必要がないのです。

神がイエスによってわたしたちに提供してくださっていることをより理解させるため、聖書は、「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい」（フィリピの信徒への手紙4章6節）、「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい」（ペトロの手紙一　5章7節）と記しています。

再びイエスの姿を注視しましょう。彼は刺され、砕かれ、罰を受け、傷つけられました。イエスはなぜ、そのすべてを受け入れられたのでしょうか？　なぜ神は、独り子であるイエスが、そのすべてを忍従することを許されたのでしょうか？

イザヤはまた、イエスの犠牲を通してわたしたちが受け取ることのできる平和といやしを明らかにしています。イエスの受けられた罰によって、わたしたちは平和を得、イエスの傷によって、わたしたちはいやしを経験します。これは、わたしたちの理解をはるかに超えていますが、イエスの受けられた激しい痛みの瞬間がわたしたちにいやしを与え、彼に加えられた破壊的な暴力がわたしたちに永遠の平和を与えます。

神の豊かさと、わたしたちが「恵み」と表現する、わたしたちに不相応な神の愛の表れには、不公正な取引と、神学的要素、犠牲的かつ契約上の深遠な要素が存在するのです。

旧約聖書に見られる「犠牲」の規定と執行は、人間の罪と不完全さを償うためのものです。十字架においてイエスは、汚れなき神の小羊として、すべての人々のため、ただ一度の究極の犠牲となって、恵みと解放という新しい摂理への道を拓いてくださいました。

わたしたちはイエスによって成し遂げられたことのすべてによって、神との平和をいただきました。これは、イエスへの信仰によって経験できる平和です。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており」（ローマの信徒への手紙5章1節）

とあるように、実に単純な

4ページ下段に続く

WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

〈全世界〉世界的な女性の働きについての新しいビジョンをライブ配信

2月12日（水）、英国にある救世軍の国際本部から、救世軍の女性の働きの新しいビジョンが発表されました。

女性の働きを「Reimagining（リイマジニング）」（再考、再想像、再構成の意。日本では、「可能性を想像する」と訳出）するため、国際本部では、①キリストを中心とする②今の時代にふさわしく③社会正義、という3つの柱が立てられました。

そして、今回、世界的な女性の働きのビジョン・ステートメントとして、「私たちはどのような女性であるのか。●キリストに倣う生活を送るために、福音によって変えられ、力が与えられている●世界に良い影響を与えるための社会正義と行動に取り組む●生涯にわたる学びと成長を通して、あらゆる可能性の実現に備える●地域及び国際的な交流と支援を通して、相互に向上する」ことが掲げられました。

世界各地の女性執筆者による聖書研究冊子（日本語未訳。英語版は国際本部のサイトよりダウンロード可能）と、全世界で用いる女性の働きのロゴ（写真左）の発表がなされ、世界中のすべての女性たちに光と命と魂の自由をもたらすという、女性の働きのイメージが強調されました。

国際本部では、世界各地の女性の働きの写真も掲示され、公開されました。

〈インドネシア〉国際緊急支援のリーダー研修を開催

1月26日（日）～2月1日（土）、世界各地から30人以上の国際緊急支援のスタッフが、2018年に地震・津波による甚大な被害の出たスラウェシ島パルに集まり、受益者の保護と介護者のケアに焦点を当てた学びをしました。支援プログラムの識別と開発、財務管理と実行、国連など他の機関との調整等、リーダーの責任について学び、パルの被災地訪問もおこない、支援経験を振り返る時ももちました（写真上）。

救世軍とは？ What is The Salvation Army?
心は神に　手は人に　Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界131の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師だったウイリアム・ブースによって始められ、家のない人々、仕事に就けない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や顧みられない子どもたち、災害に遭った人々などに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本での働きは、1895（明治28）年に始まり、伝道の拠点である小隊（教会にあたる）を開設。廃娼運動、失業者対策、病院や結核療養所の設立、児童や女性の保護、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて、様々な働きを興してきました。日本人で最初に救世軍士官（伝道者）となったのは山室軍平です。キリスト教界及び社会福祉分野における先駆者の一人にも数えられています。

1ページより

ことであり、複雑にする必要はありません！

イースターの物語は、カルバリ（イエスが架けられ、死を遂げた十字架が立てられた丘）では終わりません。復活を祝う日曜日は、イエスの復活と新しい命を示します。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」（コリントの信徒への手紙二5章17節）のです。罪に囚われていた存在、最後の敵である死、というわたしたちの古い現実は過ぎ去ったのです！　イースターの日曜日、わたしたちはキリストの新しい命へと立ち上がります。新しい命、それは永遠の命であり、罪と死の力を失わせる勝利、いやし、まったく回復させる、深い平和の中にある命です

「堅固な思いを、あなたは平和に守られる　あなたに信頼するゆえに、平和に。」（イザヤ書26章3節）

今年のイースター、あなたはキリストによるいやしと回復を経験できます。これこそが、イエスが地上に来られた理由なのです。そして、神があなたに最も望んでおられることなのです。

（救世軍士官（伝道者）・万国総督）

創立者　ウイリアム・ブース　大将　ブライアン・ペドル（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　ケネス・メイナー（救世軍本営　東京都千代田区）　http://www.salvationarmy.or.jp

発行日及び定価
▼発行日
福音版・毎月一日発行
広報版・奇数月十五日発行（除く七月）
▼定　価
福音版・一部　四〇円
広報版・一部　一〇〇円
クリスマス特集号（十二月一日号）・一部　一〇〇円
振替・〇〇一八〇―五―四四〇〇
発行兼　救世軍
印刷人　代表者ケネス・メイナー
編集人　寺澤　眞由子
〒101―0051　東京都千代田区　神田神保町二ノ十七
電　話　東京(03)三三七―〇八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　ピーアンドエス

（取扱支部）
救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会

信仰の体験談
証言のページ

オフィスの応接コーナーには、常に聖書を備えています。

キリストを知る

株式会社 iPlan　代表取締役社長
橘　智さん

東京・合羽橋。浅草にほど近いこの地域は、スカイツリーを間近に見上げ、国内外の買い物客が調理道具を買いに来る、今注目の街。その商店街の裏手に、株式会社 iPlan があります。「保険に感動を」を経営理念・経営方針に、損害保険のトータル・プランナーとして会社を経営している橘さんにお話をうかがいました。

進路に迷い台湾へ。〈働きたい〉と思った時に、出合ったこの仕事

私の父は、故郷の福島県にいた時に近所で開かれていたクリスチャンの家庭集会に参加し、そこで洗礼を受けました。十六歳で上京後、しばらくして、東京でも教会に通い始め、後に中古車販売店を立ち上げました。母は埼玉県出身で、江戸川区で一人暮らしをしている時に、教会のチラシを見て、通い始めました。母はそれまでも、「心のともしび」というキリスト教のラジオ放送を聞いていたようです。やがて教会を通して父と知り合い、二人は結婚しました。

長男として生まれた私は、両親の寵愛を受けて育ちました。小さい時から教会に通っていましたが、ある時、両親がそれまでの教会を離れ、ホーリネス教団の牧師先生方の導きを受けて「家の教会」を始め、家庭を開放して礼拝を守るようになりました。ちょうど私が思春期に入る頃、教会が家にやってきたような環境になり、中学一年生の六月に洗礼を受けました。

その後、一人っ子の私は、だんだん家にいたくないと思うようになり、ミッションスクールで、寮がある高校「敬和学園」（新潟県）に進学しました。創立者の太田俊雄先生は、

「敬和ではもちろん勉強をするが、だからといって慌てて進学をしなくてはならないということではない。長い人生、一年や二年足踏みすることは良いのでは」というようなことをおっしゃっていました。

高校卒業を前にした私は、心にしっくりくる進路がない中で、前に踏み出せずにいました。両親が一生懸命働いて学費を用意しているのを知っていましたから、心から行きたいわけでもない大学への進学は、経済的にももったいないと思ったのは事実です。当時は、ルターの著作集などを読み、たっぷりある時間をほとんど読書に使っていました。

米国留学などの道も示されたのですが、ピンとくるものがないまま帰京。行くところもなく実家で仕事の手伝いをするようなしないような、中途半端な状態でいました。そうして一年も経たない頃、父と大喧嘩。家を飛び出しました。裸一貫で事業を興した父からすると、血気盛んな年頃の私が家にいることが理解できなかったのかもしれません。

家には戻れず、そのまま中学時代の友人の家に転がり込んで一カ月過ごしました。さすがにいつまでもいられないと思い始めた時、高校進学を考える頃に出会い、やがて私の恩師、信仰の父となる日本基督教団の岡村松雄牧師が、宣教師として台湾にいることがわかりました。私のことを心配した母が電話して相談したところ、先生は「すぐに来なさい」と言ってくださいました。着の身着のまま台湾に渡った私は、先生に、

「弟子になるつもりで来ました」と申し上げました。すると「弟子も師も失格じゃ」と言われてしまいました。そこで八カ月、先生と寝食を共にし、教会を導く姿をごく間近に拝見する中で、私は変わっていきました。心から〈働きたい〉と思うようになってきたのです。帰国を決心して日本に電話すると、ちょうど電話に出た母の事務机にあったのが保険の研修生制度の案内でした。保険の仕事をしながら保険の勉強をし、給料をもらえる制度です。

〈何でもいいから働けるならやってみたい〉と思って岡村先生にそのことを伝えると、先生は涙を流して喜んでくださいました。

「智君ね、保険の仕事は、こう言っちゃなんだけど、福の神みたいな仕事でね。みんなが困っている時に、『大丈夫だよ』と旗振っているような仕事だから、そんな良い仕事はない」

と言ってくださったんです。

私は、すぐ帰国しました。

イエス様を信じていることは、私という存在から切り離すことができないのです

その保険の研修先で、一人の女性に出会いました。〈こんな素敵な人が自分の彼女だったらいいな〉と思い、食事に誘ったら一緒に行ってくれたので、有頂天になり、お付き合いを始めることになりました。お付き合いをする中で、自分がクリスチャンであることを隠さず、日曜日は教会に行っていることを伝えました。やがてプロポーズして結婚、と順調に進んでいく中で、私は、生活を共にする上で、キリスト教信仰は切り離せないことを彼女に伝えました。

この世界を創られた神様がおられること、そして、私たち人間の罪を代わりに負って十字架で死んでくださり、三日目に復活されたイエス様を救い主として信じていることは、私という存在から切り離すことができないからでした。彼女に、イエス様を信じて、洗礼を受けてほしいとまでは言わないけれども、教会に来てみてほしい、と伝えました。

イエス様が弟子の足を洗っている姿の絵と共に

実家の「家の教会」では、台湾から帰国した岡村先生などの協力をいただき礼拝を守っていました。彼女もその礼拝に出てくれるようになり、結婚予定日の一カ月半位前に、なんと自ら洗礼を志願してくれました。二月に洗礼式をしていただき、岡村先生御夫妻に、結婚の証人（仲人）になっていただき、三月に結婚。私はその時、二十二歳でした。

すぐに長男を授かり、仕事も本格的になっていく中で、私は、保険の仕事自体に悩みを覚えるようになりました。保険は近代社会に欠かせないもので、社会の発展と共に保険が発展してきました。普通の商売ならばお金に対して目に見える商品がありますが、保険は本来的に、お金を払っても、それがいつ、どのように返るのかわからないものです。私は、何のため、誰のためにこの仕事をしているのだろう？　と思うようになってきました。

それは、生活に追われている二十七、八歳の頃のことでした。ちょうど、古くからのクリスチャンの友人が、牧師となるべく献身することを聞きました。それを聞いて、あこがれのようなものを抱き、神様と直接つながる仕事が自分には合っているのではないか、と思えてきました。ちょうど三番目の子どもが生まれた頃だったので、彼をおんぶしている妻に「仕事を辞めて献身しようと思っているんだ」と言ったら、「いいんじゃない」と理由を聞かずに言うんです。〈そんなもん？〉と、かえって思い直すことにしました。

牧師としての献身の道は、神様に呼ばれないとできないことも知っていました。そのうち、牧師となった友人たちなどと話す中で、牧師の世界に世間で言うところの「やりがい」を求めてはならないことを知りました。同時に、自分の仕事の「やりがい」って何だろう、としばらく仕事をしながら考えるようになりました。

十五年ほど保険会社に勤め、十一年前、独立して現在の iPlan を設立しました。i に、「イクソス」（魚のギリシャ語・2ページに写真掲載）のデザインをあしらいました。キリスト教が激しい迫害に遭っていた時に、信者が互いの信仰を確認し合うために使った魚の絵です。

子育て中は、子どもの幼稚園の母体である日本基督教団亀戸教会に通い、そこで、賛美礼拝を導いたり、信仰の証言をしたりしていました。

そんなある時、牧師が私の名前に、「～代表取締役橘 智」と肩書を入れたことが気になって、恩師の岡村先生に相談しました。すると先生は、「君は、神様からその働き（保険の仕事）に派遣されているのだから、堂々とその肩書を記したままにしておきなさい」と言われたのです。その時、自分の視点が「自分はどこにあるのか」ばかりの、自分中心なのに対して、先生は、常に神様の視点で「あなたはどこにいるのか」を思っておられることがわかりました。私がどこで何をしていようと、神様がそこに派遣してくださっているのだ、神様がこの働きに用立ててくださっている、と思ったその時から、私の立ち位置が変わり、家庭にも教会にも、仕事にも神様が派遣してくださっているのだ、と思うようになりました。

約三十三年の保険の働きの中で痛感するのは、保険は、経済的補填しかできないもので、それは、心の安定や魂のためには無力だ、ということです。本当の心の平安はこの世の制度ではどうにもならない、と。私がこんなことを言っていいのかわからないのですが。

それでも、私がここで生き、やっていることは、私ではなく「イエス様」がなしてくださっていること、と思っています。ビジネスと信仰も、私の中では分けることができないのです。私が生きているのはもちろんですが、イエス様が私の先を歩き、なしてくださっていることにお従いするだけ、と思っています。

すべてのことを「神様の栄光のために」用いてください、と願って日々仕事をしています。同時に、一緒に働いてくださっている方方にそのことで犠牲を強いてはならないと常に思っています。教会のお客様が多いのですが、紹介を受けて、お寺からの仕事の依頼も多くあります。お坊さんとお話ししていて、牧師さんと通じることがあるなーと思うこともしばしばです。

今思い返しても、私の人生の中で、悩みや苦しみ、もがいて過ごす生活の一瞬一瞬にイエス様が共にいてくださっていました。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。」（マタイによる福音書6章33節　口語訳聖書）

会社を立ち上げた時、牧師が記念にこの御言葉のプレートをくださいましたが、今では、この聖書の言葉から離れては生きていけない、と思うようになっています。

（日本福音ルーテル東京教会所属）

キリトリ

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

ご氏名

ご住所

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。